

天皇皇后両陛下の 英国国賓御訪問を終えて

英国国王陛下からの招請を受け、六月二二―二八日に
英国を御訪問された天皇皇后両陛下。
駐英大使として御訪問に携わった林氏が、その意義を読み解く。



馬車でバッキンガム宮殿に
向かうチャールズ3世国王
陛下と天皇陛下 (Richard
Gillard / Camera Press /
アフロ)

林 肇

駐英国大使
はやし はじめ 一九八二年東京大学卒業
外務省入省。内閣総理大臣秘書官、在米大
使館公使、在インド大使館公使、欧州局長、
駐ベルギー大使兼NATO代表部大使、内
閣官房副長官補兼国家安全保障局次長など
を経て、二〇二〇年より現職。

天皇陛下が一九九三年に御自身で執筆された『テムズ
とともに 英国の二年間』が昨年新装復刊（紀伊國屋書店）
され、新たに追加された御親筆のあとがきに次の一文があ
る。「遠くない将来、同じオックスフォード大学で学んだ
雅子とともに、イギリスの地を再び訪れることができるこ
とを願っている」（二七頁）。

六月二二―二八日に、天皇皇后両陛下が国賓として英国

を御訪問された。今回の御訪問は、一九七一年の昭和天皇
皇后両陛下、九八年の現在の上皇上皇后両陛下による御訪
問以来、日英関係史上三度目となる国賓としての御訪問で
あり、天皇皇后両陛下御自身にとって特別な意味を持つも
のであったとともに、日英の親善としての意味を超え、現
在までの日英パートナーシップの集大成として、歴史的な
出来事となった。

御訪問までの長い道のり

今回の両陛下の御訪問は、日英両国間の揺るぎない信頼のもと、大変な紆余曲折を経た後に実現された。最初の国賓御訪問の御招待があったのは、天皇陛下の御即位後間もない二〇一九年、エリザベス二世女王陛下からであった。筆者は当時、まだ現職におらず、東京の内閣官房に勤務していたが、当時の関係者との間で、御訪問に向け最大限に日英関係を深化させるため、経済や安全保障分野での具体的な協力について議論を重ねていたことを憶えている。しかし、御訪問については、その後の新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、延期とせざるを得ず、日程の再調整を余儀なくされることとなった。

筆者が二〇年一二月に駐英国日本国特命全權大使を拝命した際には、まだコロナ禍の真只中であつたが、年が明けて英国でいち早くワクチン接種が始まるなか、国賓御訪問の実現は大きな使命となるとの認識を持って赴任した。同年、英国はG7の議長であり、一部の閣僚会合やG7サミットが対面で開催されるなど、国際社会が新型コロナウイルスから回復の兆しを見せ、御訪問に向けた機会の窓が再び開きつつあったかと思われた。しかし、たいへん残念なことに、

翌二二年九月、エリザベス二世女王陛下が崩御され、天皇皇后両陛下は、女王陛下の国葬への御参列という別の目的のために英国を御訪問されることとなった。

チャールズ三世国王陛下が王位を継承され、二三年には秋篠宮皇嗣同妃両殿下が御差遣された国王陛下の戴冠式があり、その直前には『テムズとともに』の本邦新装復刊も実現するなど、再び天皇皇后両陛下の英国国賓御訪問実現に向けた機運が醸成されつつあった。本年に入り、改めて英国より正式に天皇皇后両陛下の国賓御訪問の招待が行われ、二月には国王陛下のがんの御公表もあったが、その後の国王陛下の順調な御回復もあり、日英間での慎重な調整の結果、宮内庁および英王室府は四月二十七日（日本時間）、天皇皇后両陛下の国賓御訪問を六月下旬で調整する旨、公表した。

両国間で御訪問の準備が進み、いよいよ実現かと思っていると、五月二二日にスナク首相が急遽英国議会下院を解散し、総選挙を七月四日に実施する旨を発表した。これを受け、英国内にてしばらくの間、検討期間を必要としたが、皇室・王室間交流と国際親善の趣旨に照らし、両陛下の国賓御訪問を予定通り執り行う旨、英国側から回答を受けることができた。筆者も英国政府の中枢関係者らに対し、日

本から見て英国での総選挙期間であることは、国賓御訪問の意義を損なうものではないことを静かに説き続けた。このように今回の御訪問の実現に至る過程で日英は多くの困難に立ち向かうこととなったが、両国の揺るぎない信頼関係があつてこそ、このタイミングでの実現が可能となったものと考ええる。

日英パートナーシップの飛躍的發展

このような信頼関係を土台とする日英のパートナーシップは、両陛下下の国賓御訪問に先駆けて、近年飛躍的に發展してきた。日英包括的經濟連携協定（EPA）や日英部隊間協力円滑化協定（RAA）の署名から運用にかけてのプロセス、環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（CPTPP）への英国の加入交渉およびその実質的な妥結、英空母打撃群による日本寄港、そして日英伊によるグローバル戦闘航空プログラム（GCAP）の立ち上げはいずれも二〇二〇年以降に実現した大きな成果である。

現代史を振り返れば、このパートナーシップは必ずしも常に強固に維持されてきたわけではない。二〇一〇～一六年の英キャメロン政権下では「英中の黄金時代」が喧伝さ

れ、いくつかの外交課題における日英の立場の相違が顕在化することもあった。ところが、ブレグジットを発端とする英国側の変化が日英パートナーシップ進展の契機となり、両国は、基本的価値を共有する戦略的パートナーとして外交上の重要課題で連携し、パートナーシップを重層的に發展させてきた。昨年五月に岸田総理とスナク首相が発出した「日英広島アコード」は日英パートナーシップの飛躍的發展を象徴する直近の最大の成果である。

今回の御訪問と日英パートナーシップ

今回の両陛下下の御訪問は、日英パートナーシップが外交的修辭ではなく実体であることを国際社会に示す機会となった。両陛下下の御訪問全体を振り返り、最も印象的であったエピソードを二つ紹介する。一つ目は、六月二五日に歓迎行事の一環として執り行われた、ホースガーズからバッキンガム宮殿への馬車パレードである。宮殿へとつながる大通りザ・マルには、御訪問期間中ユニオン・ジャックとともに日章旗が交互に飾られ、パレード当日の沿道では、当地在留邦人や旅行中の邦人など大勢の方々が日章旗を振って歓迎してくださった。筆者は、天皇皇后両陛下や国王王妃両陛下、ウィリアム皇太子殿下らに続く四台目の馬



6月25日、国王王妃両陛下主催による晩餐会を前に談笑する(右から)チャールズ3世国王陛下、天皇陛下、皇后陛下、カミラ王妃陛下 (REX／アフロ)

車に乗る機会を得て、たいへん感動的な光景のなか、日英パートナーシップの広がりを感じた。

二つ目は、同日夜にバッキンガム宮殿で行われた国王王妃両陛下主催晩餐会でのスピーチである。まず国王陛下が歓迎の辞の中で日英のパートナーシップに三回言及され、そのパートナーシップが日英の深い絆に根ざし、友情を中心とするものであり、今後一層発展していくとのメッセージを述べられた。次に、天皇陛下は御答辞の中で、日英関係はさまざまな分野で重層的な連携・交

流を加速させ、かつてなく強固な発展を遂げているとのメッセージを述べられた。両陛下のスピーチは、日英間の事前調整などなかつ

たにもかかわらず、そのトーンは驚くほどに一致しており、今回の御訪問が、国際親善という意味を超え、両国がパートナーシップのビジョンを共有していることを示す象徴的な機会となった。二七日の宮殿でのお別れの御挨拶の際、天皇皇后両陛下と国王王妃両陛下がスキンシップをとりながら別れを惜しまれるお姿は、まるで家族のように感じられ、筆者にとつてこの実感を確信させるものとなった。

日英関係のさらなる発展に向けて

日英の友好は一朝一夕に築かれたものではない。長い年月をかけて着実に積み重ねてきた信頼関係の賜物である。今回の御訪問先は、世界最先端の科学技術の粋を集めたフランシス・クリック研究所、V&A子ども博物館や王立音楽大学などの芸術文化施設、経済の中心地シティにあるギルド・ホール、そして学術の都オックスフォードなど多岐にわたり、日英パートナーシップの成熟を照らしたす機会となった。当地では七月四日の総選挙の結果、スターマー首相による一四年ぶりとなる労働党の新内閣が発足した。わが国は、かつてないレベルに到達したこの日英パートナーシップを、両国の揺るぎない信頼のもと、新たな英国政府との間で引き続き発展させていくことになる。●